

火星



平成19年3月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

寒波近づく逆光の鴨百羽

竹馬の影曳く学級閉鎖の子

風花や適塾の扉の開いてあり

豆打ちし母の素足に紅させり

スリッパのつま先の闇春の雪

雨傘のふたりの前の梅一枝

紅梅にかかはる声を夕鴉

春昼の紙燭寄せられあるところ

捕鯨図のひろげありけり黄水仙

堂守が枢落せし夕ざくら

太白星

柳生千枝子

石榴枯れをり美しき葉を落し
幼な子の髪つややかに冬に入る
冬といふ語感柔らかか日記書く
しんと夜寒夫の遺影を仰ぎをり
夜泣蕎麦通り過ぎゆく冬銀河
冬川の銀の一線海へ注ぐ
白梅の花弾け出す昨日今日

杉浦典子

からつぼの厩灯れり寒波来る
梟や母なき夜爪切つてをり

てのひらに受けたる火吹竹の息
天保山の頂を踏む冬の蜂
風花へ両手で背中押されたる
綿虫と古墳の裏へまはりけり
チエ口弾きに黒き椅子あり十二月

浜口高子

もこもこのスリッパ履ける湯冷かな
茶の花に触れて山気の下りて来し
笹鳴や糲殻に足沈みたる
風花や蓄音機の蓋開いてゐる
燃え残る榾火を抱き山眠る
歳晩の海に浮きゐる投げテープ
大年の下船のタラップ殿に

火星作品

山尾玉藻選

男山やまふところの柚子湯かな
八幡丸山照子
枯芝に風の道ありシヤボン玉
笑ひすぎたり山茶花のこぼるるよ
煤逃げが荷を昇くことにかかはりし
葉牡丹の部屋に枕をならべけり
みたらしの水涸れてゐし人多し
八幡大山文子
顔見世の真向ひに買ふ宝くじ
水槽の鮫ひるがへるクリスマス
昼灯す裸電球餅筵
数へ日の白木の墓に詣でけり
明石戸栗末廣
枢出で冬ざれの風入れかはる
風花す採りつくしたる大根畑
かうはしてをれぬと見れば返り花

梅の枝の四方八方冬構
このごろの遠出の微熱花八つ手
冬の月夫にかはりて般若湯
自転車で社に來たる曆売
煤払あの世の夫の眼鏡落つ
鷹去りし木を大勢で仰ぎをり
日溜りは散り山茶花の吹き溜り
茶の垣に囲はれ九条葱太る
冬深し買ふはまぐりの石の音
枇杷の花老妓の洗ひ立ての顔
蕪蒸予後の喉のすなほなる
炉明りの肩書き多き名刺なり
凸凹の小鍋に葱鮪諾へり
鯉揚げの鯉の目玉に夕時雨
忘年やうろこ崩れし夜の雲
白鷺に年越す枝のありにけり
旧曆のやさしき年を越しにけり

神戸深澤鱻

宝塚山本耀子

宝塚山田美恵子

選のあとに

山尾 玉藻

男山やまふところの柚子湯かな

丸山 照子

作者は京都八幡の男山の中腹に住まわれる。「男山」と言う字面とひびきに、懐深い風趣が感じられる。それを上五に据えて、一句に大ぶりでゆったりとした表情が漂い、「柚子湯」と言う営みの床しさや、また作者の満ち足りた境地を充分に伝えている。固有名詞が眼目となり成功している。

顔見世の真向ひに買ふ宝くじ

大山 文子

最近、京都のあちらこちらで、非日常的な空間と超現実的空間が混在する景に出くわし、その違和感に少なからず戸惑ってしまう。掲句も、京都の歳晩の代表的な風物詩「顔見世」と、現在ではすっかり暮の恒例行事となったジャンボ「宝くじ」売場が、四条通りを挟み向き合っているのである。「顔見世の真向ひ」と言う意識下に、作者の何とほないわだかまりが感じられ、面白い表情を見せる作品である。

柩出で冬ざれの風入れかかはる

戸栗 末廣

冬の葬儀場は何処からともなく隙間風が吹きこみ、しんしんとした冷えに包まれる。その上、出棺どきともなれば、戸外の風が一気に吹き込み、否応無しに一層の冷えところの寒さに囚われてしまう。「冬ざれの風入れかかはる」の写生には実感があり、尚且つ、言外に深いものを語っている。

煤払あの世の夫の眼鏡落つ

山田美恵子

「亡き夫」ではなく、「あの世の夫」である。人間的な手触りを感じるこの表現に、作者の感傷の深さが窺える。作者には「眼鏡落つ」音が、夫からの交信のように思えたことだろう。人それぞれの「煤払」があり、深い感銘を受ける。

枇杷の花老妓の洗ひ立ての顔

山本 耀子

叔父の死後、叔父のお姿さんであった方と三十年ぶりに会うことがあった。八十五歳の素顔は驚くほど美しく、品位と誇りに満ちていた。掲句、「洗ひ立ての顔」の思い切った表現は、「老妓」の凛とした品位と自負心を想起させる。目立たない「枇杷の花」の配合で、一句に程よいバランスが生まれた。

鯉揚げの鯉の目玉に夕時雨

深澤 鱈

毎年十二月に京都の広沢池では池浚が行われ、見事な大鯉が揚げられる。何ごとかと睽目する「鯉の目玉」に実体感があり、「夕時雨」が一層の臨場感を生んだ。構図と趣向に技倆を感じさせる作品である。

風花や往診かばん到着す

米澤 光子

作者のご主人は長らく自宅療養されている。真つ黒で四角い往診鞆には存在感があり、到着した医師が真つ先にそれを玄関先に置いたのである。その際立った一瞬を、「往診かばん到着す」と鮮明に再現して見事。何よりも思い切った擬人法が功を奏した。「風花や」の明るさにも病状の良さが窺える。

恒星圈

戸栗末廣

更けて夜の鴉が啼けり神の留守
寒雀空高すぎし青すぎし
花八つ手老人ばかりの遺族席
はらからの声たしかむる十二月
いつよりか犬がとりもつ冬帽子

田中みのる

戸田春月

祝 玉藻先生御集ご上梓

千年の法灯抱き山眠る
そのかみは女人禁制青木の実
青木の実ろくろ峠の女かな
冬紅葉石の宝殿水に浮く
化野も斯くやと許り蓮枯るる

冬さうび今日生駒嶺の明るかり
風花や虎姫駅を過ぎしころ
冬すみれ老女ばかりのクラス会
諍へば白鳥の声濁るかな
河豚食うべまた逢ふ日まで別れけり

土屋酔月

長屋璃子

冬に入る母の南天のど飴も
万華鏡のぞけば中も時雨をり
耳遠き人にあひづち冬ぬくし
饒舌の少くなりし寒かりし
古本を束ねてつるべ落しかな

指先に紙繕延びゆく虎落笛
靴ひもの解けし足もと町師走
悴みて一灯くらき駐在所
ねぎま鍋つつき現在いまあるばかりなり
ネーミング競ひ並べり今年米

獅子座

山尾玉藻推薦

西畑敦子

手焙に碁敵の手とふれにけり
風花や朝市のものみな淡し
落ちてゐし下仁田葱の太りやう
雀らの寄る木伐られし十二月

高橋芳子

浮きぬたり兎失せぬし朝の月
冬木の芽退職近きベントツ来る
天気凶の境目に居て猪の鍋
猪名口やべた凧のごと干す寒天

橋本寒郎

染め髪を鏡に映し冬立ちぬ
辞書の上のシャコバサボテン咲きにけり
冬蝶の影引き歩く石畳
きざはしに冬の闇ある真昼かな

渡邊美保

夕べ来て潮の匂ひの寒椿
目覚めれば冬涛の音床柱
鴟の贄去年の指切り思ひ出す
烏賊墨に染まる俎板花八ツ手

永嶋みね子

ふるさとを思うてをればあたたかし
何も持たぬ我れを見上げて寒雀
冬菊の白を仏間に遠出せり
暖房車眠る頭の大きかり

蘭定かず子

花柵薪割る音にこぼれけり
駐輪の尻揃へあり十二月
落葉道後ろ手にゆく修道女
冬萌に測量器材集めあり

大城戸みさ子

ぼつぺんを吹いては一人霜夜かな
神棚に糲殻こぼる寒卵
風花や婚の荷がゆく五條坂
熱爛を売る舟寄り来川下り